新潮文庫

質屋の女房

安岡章太郎著

新潮社

質屋の女房

定価は帯またはカバーに表示してあります。

新潮文庫 草130 B

昭和四十一年七月二十日 発行
昭和四十六年八月二十日 七刷

著者 安岡章太郎
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊟ 印刷・株式会社金羊社　製本・憲専堂製本所
© Shôtarô Yasuoka 1966　Printed in Japan

新潮文庫

質屋の女房

安岡章太郎著

新潮社版

1733

目次

ガラスの靴……七
陰気な愉しみ……三一
悪い仲間……四七
夢みる女……七九
肥った女……九七
青葉しげれる……一一九
相も変らず……一五九
質屋の女房……一九七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

家族団欒図……二三
軍　歌……二三九

解説　小島信夫

質屋の女房

ガラスの靴

夜十二時をすぎると、日本橋もしずかになる。
ときどき高速度ではしり去る自動車のエンジンが、キインと大げさな物音を遠くまでひびかせる。
「どうしたの」
僕は汗ばんだ受話器をもちかえ、テーブルに足をかけて、椅子にもたれた背をそらせながら、ベッドの中からかけてくる悦子の電話にこたえた。
「ああ、あたし、熊に会いたいな。あなた、熊がお魚かついで歩いてるの、見たことある？」
「ないよ」
「つまンなそうに返辞するのね。熊っていいなあ。熊は人間とお話しできるんですって、ほんとかしら」
「知らない」
「だって、あなたの田舎は北海道だっておっしゃったくせに。そんなこと、知らないの」
僕は、うすい鉄板をわななかせて伝ってくる悦子の声をききながら、ガラス戸の中に、青黒い背中をそろえて並んでいる猟銃の列をながめる。……ぺちゃんこの胸、変にながい手足、子供みたいな悦子の軀（からだ）は、抱きよせるとき、僕の胸のなかで折れそうになる。そのくせいったん抵抗し

はじめると、どこと云って抑えようのない、まるで水の底で海草にからまれたような始末の悪さなのだ。……何がいまさら、クマだ。僕はこころの中でつぶやく。いまのうちに何とかしなければならない。それはしかし、悦子の側の期待であるはずではないか。――熊に会いたい。それは彼女の合図だ。

「夏休みも、もう終るね。……あと幾日ぐらい？」

「いや、いや」

僕は、僕らの間でタブウになっているそのことに、わざとふれてみる。

待つことが、僕の仕事だった。

N猟銃店の夜番にやとわれていた僕は、夜の間、盗難と火気を警戒する役目なのだ。しかし、それは仕事にはならなかった。弾薬室の扉のところに掛っている湿度計と寒暖計、僕はそれと同じだ。火事は、寒暖計で読みとるわけにはいかないし、闖入してくる盗賊とたたかう勇気は、僕にはなかった。僕はただ、火事と泥棒とがやってくるのを待つだけだ。

そしてそんなものに待ちボウケを食わされることで、やっと僕のクビはつながっていたわけだ。住居のない僕はそんな風にして、ともかく朝晩のメシと夜の居場所を得ていた。昼は、教室の椅子の上で寝るために、学校へ行った。

店の主人にたのまれて、僕は原宿にある米軍軍医クレイゴー中佐の家へ、鳥撃ち用の散弾をとどけた。云わばそれは、僕には番外の用だったし、そのうえ五月のはじめの暑い日で、途中クシ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ヤミばかり出ていやでたまらなかったが、行ってみると僕は、ちょっとした歓待をうけた。やせた、色の青白いメードが、飲みものや菓子を出してくれた。彼女は僕をみて、テレたような、だまってオナラした人がするような笑いをうかべた。僕は彼女を羊に似ていると思った。紙を食っている白い羊を、何とはなしに思い出させた。奥から、だいぶ年寄りらしい黒白ブチのポインターが台所のドアを自分で開けてやって来たので、僕はチンチンさせるつもりでクラッカーを差し出したが、彼は見向きもしなかった。彼女がそれにチーズを塗ってやるとやっと食べた。おわると犬は、チラリとうさん臭さそうに僕をながめ、机の上に頬杖をつく学者のような顔をして、どたりと彼女の足もとに腹這いになるのだった。彼女はクレイゴー中佐が夫人同伴で明日からアンガウル島へ出掛けること、それで彼女は三月ばかり一人で留守番をさせられることなどをぽつりぽつり話した。僕が帰ろうとすると、彼女はもっと居ないかと云い、パイプをくわえようとする僕に、シガレットを出してくれた。彼女の動作は変によわよわしい。マッチをすってくれるときに、火の出るのを怖れるみたいに、軸木のハジの方を不器用につまんで、おそろしく真剣な顔付になるのだ。僕はふと、彼女を、そだちのいい人ではないのかと思った。

その日、僕は意外にゆっくりしてしまった。帰りしなに彼女は、またあのテレたような笑いをうかべて、よかったらときどき遊びに来てくれと云った。僕は彼女の言葉にしたがった。その方が、かたい椅子しかない学校へ行くより余程よかったから。

そんな風にして、悦子と僕はしたしくなった。しかしそれにしても、後になって彼女に惚れて

しまうことになろうとは、気が付かなかった。どちらかと云えば、彼女は魅力のとぼしい方だった。

一週間ばかりたって或る日、行ってみると、彼女は病気だからと云って、テニスのラケットの模様のついたユカタを着ていた。僕がその模様を子供っぽいとひやかしたことから、話は小学校の頃の夏休みのことになった。悦子は自分は優等生だったと云った。そう云えば、彼女の青白い皮膚や、へんにキチンとした身なりに、いかにも級長さんらしい所があった。けれども、学校のはじまるのが厭(いや)だったのは、ビリだった僕と同じだった。終りに近付いた休みの日が一日一日と消えて行くときの憂鬱さ。活気のなくなった暑さの中でひとりぽつねんと子供心に感じる焦躁(しょうそう)。そんなものが僕たちの心によみがえり、それがなつかしいと云うよりは、ジカに二人の気持ちにふれあった。僕は云った。きょうもまた怠けて遊んでしまい、手のつけてない宿題帳の山をながめながら、ヒグラシの鳴くのをきくのはやりきれなかった、と。すると彼女は突然きいた。

「あなた、ヒグラシの鳥って、見たことある？」

僕は驚いた。悦子は二十歳なのだ。問いかえすと、彼女は口もとにアイマイな笑いをうかべている。そこで僕は説明した。

「ヒグラシっていうのはね、鳥じゃないんだ。ムシだよ。セミの一種だよ」

悦子は僕の言葉に仰天した。彼女は眼を大きくみひらいて、――悦子の眼は美しかった――

「そうオ、あたし、これくらいの鳥かと思った」と手で、およそ黒部西瓜ほどの大きさを示した。……僕は魔法にかかった。ロバみたいに大きな蝶や、犬のようなカマキリ、そんなイメージが一時にどっと僕の眼前におしよせた。僕はたまらなく愉快になり、大声をあげて笑った。すると彼女は泣き出した。

「あなたのおっしゃることって、嘘ばっかり。だってあたし見たんですもの……軽井沢で」

そう云って彼女は、僕の肩によりかかって泣くのだ。

ポロポロ涙が頬をつたって流れている。僕は狼狽した。

「そうだね。軽井沢にはいるかもしれない。ほんとは、僕はまだヒグラシなんて見たことないんだ」

僕は彼女を横から抱いてみた。しばらくそうしていた。濡れて光っているので眼がいっそう大きくみえた。ウブ毛のはえた白い顔を見つめながら、僕は彼女の体臭をかいだ。それは子供の臭いだったかもしれない。しかしその乳くさい臭いが不意に僕に、女を感じさせた。僕は髪の毛をかきあげて、耳タブに接吻した。悦子は僕のするままになっていた。

あとになって、僕は不安になった。自分のしたことが、よほど下卑たことに思われた。それに僕は、悦子の了簡をはかりかねた。彼女は本当に何も知らないのだろうか。困惑した僕は、たかだか自分の唾液で女の耳を濡らしたにすぎないことを、ひどく誇張して考えた。軽井沢には西瓜ほどのセミがいるなどと、それが僕にはどうやら本当のことになりかかっていたのだ。ところが、

実際は「嘘つき」は悦子の方だった。その晩おそく、彼女から電話がかかって来た。
「どうした。気分が悪いの？」　病気だと云っていた彼女は、昼間のことがタタって熱を出したのかも知れぬと、僕は受話器の前でせきこんだ。すると、彼女はこんなことを云うのだ。
「カエルがいっぱい飛んで来て、眠れないの。……あたしの顔に冷いものがさわるのよ。電気をつけてみたら、雨ガエルなの。何処からはいって来たのかしら、ベッドの上にいっぱいいるの、……小さな、小指のさきぐらいの雨ガエル」
　僕はそれは信ずべからざることだと思った。もし、カエルのことが本当だとしても、もう二時にちかいのである。もはやこれは、彼女のワザとやっていることにちがいなく、とすれば昼間の「ヒグラシ」もまた彼女のつくりごとではないだろうか。そして彼女は、僕の疑いを裏書きするかのように、その後同じ方法を何べんもくりかえして使いはじめた。たとえば彼女は、木や、草や、獣や、そんなものの名をいちいち僕にしつっこく訊ねるのだった。そして、ふと「あなたって知ったかぶりね。何でも知ってるふりするのね。もっともらしい顔して」とケラケラ笑って喜ぶのだ。そんなとき彼女は、オモチャのようなセルロイド製の黄色い腕環を、ひけらかすみたいにはめていた。
　けれども、同じことを何べんも反復するのは、悦子のクセでもあるらしかった。単純なトランプのペイシェンスを、半日も続けてやることがあった。クルミ割りがこわれたときのことだ。僕が、中学生のころ運動部の合宿でやった、ドアの蝶つがいにクルミをはさんでつぶす方法を教え

ると、彼女はすっかりそれに熱中してしまった。はじめは菓子につかうから、三つか四つ割ればいいと云っていたのだが、食堂の大きなドアのまわりをぐるぐる息をはずませて駈け廻り、「ほら」「ほら」と一つ割るたびにいちいち得意になる。それでこちらも、「うん、なかなかうまい」と調子をあわせるうちに失敗して、皮も肉もいっしょにつぶれたりすると、「よウし、こんどこそ」ともう夢中で、ふだん汗かきでないことを自慢にしている額をビッショリぬらしながら、重いカシの扉をばたんばたん云わせて、もう何時はてるともキリがない。……犬のスペックスはおどろいてガンガン吠えるし、この日僕はクルミの食いすぎで、頭が完全におかしくなった。

だんだん僕はずうずうしくなった。朝、つとめが終ると、すぐ悦子のところへ出掛けて行き、シャワーを浴びてから、居間の長椅子でひと睡りするのが、いつか僕の習慣みたいになってしまった。入口のドアを開けてはいって行くとき、僕は、たったいままで夜番だった俺がこれからは泥棒になる、とおかしい気もするのだが、昼寝から醒めた頃にはもう悦子の作ってくれるコーヒーを、「すこし水っぽい」などと云うのだった。同じことが悦子についても云えた。絨毯の上にそのまま横坐りした彼女が、片ヒジを皮のストゥールにのせて、うつむき加減に本を読んでいるときなど、うっかり僕は、彼女がずっと昔からこの家でそだてられた娘であるような錯覚を起した。ちょうど居間の片側の壁に、汽車のコンパートメントみたいな作りつけの椅子のある一間ほどの出っぱりがあって、そこにいかにも悦子の好みの煖炉が切ってあった。焚き口に、石炭にみ

せかけた黒いガラスのかけらが山のように積んであって、その奥に色電燈が仕掛けてある。スイッチをつけると、黒いガラスは中側から赤く光り、燃えているように緑や黄いろの焔をあげるが、そのくせちっとも温くはない。それは装飾品なのである。僕らはよく、

「汽車に乗ろう」とそこへ行った。彼女は「おベントウもってかなきゃア」と菓子をもって来て、

「まア、フジサンがよく見えますこと」

と炉棚の上に飾ってある山の絵を指してしゃべりながら、食べるのである。しかし向いあった椅子と椅子との距離が一間もあるので、僕らは結局床の上へ降りてしまう。すると、――もともと、「汽車」は、区切られているために部屋中で一番暗い場所なのだが、――僕らのまわりは、テーブルや椅子やその他いろいろの家具の、峡谷の底みたいに暗くなってしまい、煖炉からくる赤い光だけが、悦子の顔の半面を照らしだす。寝ころんだ僕は、毛の長い絨毯がへんにしめっぽく軀全体にまつわりついてくるのを感じながら、影のできた彼女のあかい顔に、いつか唇にふれた耳タブの感触を思い出した。僕はムズムズしてくる。手を出してみようかな、と思う。が、いつでも手のとどく所にいる彼女に、何故かそれは出来ない。ことさらそんなことはしなくても、という気になる。……これが恋愛というものだろうか。最初にうけた印象と今とでは、悦子の容貌がまるで変って見える。

僕はいつの間にか、悦子のオトギ芝居に片棒かつがされていた。そしてそれが愉しい。彼女の云うことをきいてやることが、かえって僕には、彼女を自分の「持ちもの」にした感じなのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com